琉球大学学術リポジトリ

文末表現「けれども」の機能についての再考

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-04-20 キーワード (Ja): けれども, 前置きの用法, 倒置, 期待 キーワード (En): 作成者: 金城, 克哉, Kinjo, Katsuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002000997

Ryudai Review of Euro-American Studies No. 46, 2002

文末表現「けれども」の機能についての再考

金城克哉

0. はじめに

これまで下の会話のBの発話に見られるような「言いさし」の表現は、日本語学ばかりでなく、日本語教育の中でもかなり議論されているところであり、特に「Sけれども」については多くの先行研究がある（以下、表記を統一するため「けど、けども、けれど、けれども」を一括して「けれども」として扱う）。

(1) A：ねえ、今度の日曜日ひま？

B：とくに予定はないけど。 (SFJ3：12) [1]

例えば、森田良行（1980:135-136）は、「Sけれども」の言いさしには「請け合えない、責任がもてない、自信がない、心ならずも、意志や希望に反して、本心はそれとは反対なのだが、やむを得ず、不満足ながら」といった話し手の心情が表されているとし、水谷・水谷（1988）では、「この用法における『が』や『けど』は、ためらいがちな、ゆれを伴った口調で、決定的な印象を与えないように発音される。『けど』や『が』は、要するに、遠慮なく要求を述べるよう、相手をうながす役割を果たしているのである」と特徴づける。「日本語文型辞典」（1998：109）には「文を途中で省略した形で、いいわけ、事情の説明などを柔らかい調子で述べるのに用いる。・・・間接的に依頼をするのにも使う。丁寧体、普通体どちらの文にも付く。丁寧体に付くと女性的で丁寧な表現になる。話しことば」とある。三原嘉子（1994:87）は「ケレドモ文は、依頼、要望や断り、また自分の意見を述べることなど、表された内容が、聞き手に対して何らかの負担（実際的あるいは心理的負担）をかけてしまう、または話し手が相手に負担をかけてしまうと推測するような場合に使われることが多い」とする。白川（1996）は、みかけ上「ケド」で終わっている文を「省略」「言い終わり」「言い残し」と分類し、「言い終わり」に焦点をあて、さらにこの「言い終わり」のケド節の「終助詞的な用法」・「倒置的な用法」・「挿入的な用法」

という3つの用法を抽出する。こういった状況の中、佐藤（1993・1994）の研究は中・上級学習者への指導を視野に入れ、ビデオ教材の会話を調査して「けれども」や「が」による「言いさし」表現の機能を (i) 暗示的情報要求のサイン、（ii）明示的情報要求に伴う禁忌侵犯の回避、（iii）敬語の過剰使用の回避、（iv）依頼や勧誘における目的達成の方略としての明示的情報要求の回避、(v) 討論での turn 譲渡における turn taking 強制の回避の5つに分類している。金城（2001）では佐藤の機能分析の不備を指摘し、仮説が提出された。この論文では、以下その仮説をあらためて検証し（セクション1)、「前置き」の用法と「言いさし」の関連性を指摘（セクション2)、あらためて逆接の接続詞とされてきた「けれども」がどのようにこれらの用法と繋がりを持つのか（セクション3）を調べることを目的とする。ここでは（必ずしも全てではないが）「期待」という概念が「けれども」の様々な用法を結び付ける重要な働きをしていることが明らかにされる。

1. 仮説の再考

金城 (2001) では「けれども」を終助詞と見做すべきものであると示唆した。その上で、これまで「やわらげの表現」とされてきた用法に注目し、日本語テキスト並びに NHK のラジオ電話相談のやり取りを調査した結果、この構文の現れる言語的コンテクストには特徴があると指摘された。この構文は次のパターンに多く現れる。[2]

A：質問

B：答え（＝「Sけれども」）

さらに、それ以外の言語的コンテクストを検討した結果次のような仮説がたてられた。

仮説1：話題を提供する場合の「Sけれども」を除き、いわゆる「言いさし」の「Sけれども」は「自分が提供する情報が相手にとって不十分ではないか」、または「情報は十分かもしれないが、その情報を要求するもととなった相手の動機並びに期待にそえないものなのではないか」という話し手の意識がある場合に用いられる。

この仮説1を上記（1）の場合に当てはめてみよう。「Sけれども」は質問に対する答えの形式として現れる。Bは、Aの日曜日に時間があるかどうかという質問に対して、「とくに予定はないけど」と答える。Bは相手に情報を提供するように求められ、要求された情報を相手に与える。しかし、その情報提供作業に加えて、その答えの形式を「Sけれども」にすることによって言いきりの場合（「とくに予定はありません」）とは異なる何らかの心情を表していると考えられる。その心情とは、「自分には日曜日に特に予定はないので時間はある。しかし、この情報は自分に暇かどうか尋ねるもとになったAの動機を満足させるものであるのかわからない」ということになる。つまり、BにとってはAが何故自分の日曜日の予定を尋ねるのか（＝Aの質問の動機）はわからない。それは「映画を見に行くため」であるのかもしれないし、「引っ越しを手伝ってもらう」ためのなかもしれない。Bとしては、とりあえず要求された情報は相手に提供するのだが、「とくに予定はない」という答えが例えばAのやりたかった（であろう）「映画を見に行くため」に都合がよかったのであろうか、という心情を表わしていると考えられるのである。

これまでの研究では言いさしの「Sけれども」は話し手の「謙虚さ」を表すとか（水谷1985）、「語調をやわらげる・ソフトな表現」（畠1988：113、川村1991：55、熊井1992：21）と指摘されてきた。こういった分析にはそれなりの説明力があるが、日本語学習者がこの表現を「やわらげ＝丁寧さ」と見做し、不適切な使い方がなされるということがあった（佐藤1993・1994）。この仮説1は先行研究を否定するものではないが、これが示唆するのは「謙虚さ」とか「やわらげ」ということの背景に相手のことを思いやる「配慮」または「気遣い」が働いているということである。つまり、（主に「質問・答え」の形式の場合であるが）相手の質問の動機にまで踏み込み、それを満足させることができるかどうか定かではないという心情を表わす。翻って聞き手の側からすればそういう話し手の気遣いは自分に「配慮をしてもらっている」と感じられる。それがこれまでの研究では「やわらげ」という機能の抽出に至ったのではないだろうか。[3]以下、仮説1の検討に移るが、これまでのこういった「やわらげ」並びに「謙虚さ」といった機能では説明できない例を取り上げ、この仮説1の説明

力を検証してみよう。

佐藤（1993・1994）では「Sけれども」のturn takingのストラテジーとしての機能が取り上げられている。佐藤は「聞き手への情報要求がなされるということは、とりもなおさず、そこで発話のturn（順番）の交替が行われるということを示す。・・・『どうですか』などとあからさまに他者の発言を求めることをせずに、すなわち聞き手にturn takingを強制することなしに、turn交替の可能性を仄めかすという機能があると見ることができよう」と結論づける。実際、例えば次のように「Sけれども」の発話の後に会話の順番が交替するデータが散見される。

(2) [4] カウンセラー　：ななめに抱いて
　　母親　　：はい
　　カウンセラー　：片方の手で
　　母親　　：はい
　　カウンセラー　：そういう抱き方？
→　母親　　：あ　えっといろいろ抱いたりしてるんですけどー
　　カウンセラー　：例えば？

この発言の交替は上記の仮説1から導かれるものであると考える。つまり、「Sけれども」は相手の質問の動機にまで配慮した表現であり、話し手には情報提示が相手の期待や欲求を満たすのに十分かどうかわからない。裏をかえせば、それは相手に期待や欲求が満足させられたかを確認して欲しい、確認の合図として相手に反応してもらいたいという反応要請につながる。聞き手がそれを察知するのなら、次に会話の順番を引き継ぎ、何らかの反応をするのは当然のことであろう。会話分析の枠組みでのサックス等の議論（Sacks, et. al.:1974）に従えば、「Sけれども」は発話交替のきっかけとなるtransition relevant placeであると分析される。

次に（3）のようなよく引用される例を取り上げてみよう。

(3)　お茶がはいりましたけど。

Itani（1993:36）では（3）の発話者は聞き手に「こちらまでやってきてお茶を飲んで欲しいが、もしそうしたくないのならそうしなくてもいい」と、相手

へ次の行動をどうするのかのオプションを与えているために（3）が丁寧な発話になると分析する。レイコフ（1973）の言うように、相手の行動を縛らない、オプションを与える場合に丁寧になるという議論が日本語の場合にも成り立つなら、確かにこのような説明にも一理あると思われるが、ここでは先にも述べたように「Sけれども」は基本的に「丁寧さ」を表わしてはいない、という立場をとる。そして、仮説1によれば、（3）の発言は次にように分析される。すなわち、話し手はお茶をいれた。しかし、それ（＝お茶が飲める状態にあること）は聞き手が期待していたこと・望んでいたこと（＝お茶を飲みたい？）とは一致しないものであるかも知れない。その話し手の不安定な心情を表わしたものが（3）である。そして、この場合にも（2）のように相手への反応要請が現れたものであると考えられる。なんとなれば、聞き手はお茶が準備されているところまでやってくるとか、「はい、いただきます」など、非言語的・言語的を問わず、(3) の発言に対して何らかの反応しなければならないのであるから。

佐藤（1993・1994）が指摘しているように、日本語学習者、特に中級・上級の者の中にはここで取り上げているような「言いさし」の不適切な使い方をするものがいて、それは先にも触れたように「やわらかさ＝丁寧さ」と捉えられいるためであった。金城（2001）では、「Sけれども」の発言が不適切になるような場面の考察を通して仮説を支持する根拠とした。ここであらためてそれらを検討してみよう。

(4)　(a)　A：いつごろお帰りになりますか。
→　(b)　B：もうすぐ帰ると思いますけど。
　　(c)　A：じゃ、すみませんが、お帰りになりましたら、
　　(d)　　お電話くださいとお伝えください。
→　(e)　B：はい、わかりました（＊けど）。
　　(f)　A：じゃ、よろしくお願いします。　　(SFJ3：39)

仮説によれば（4b）に現れる「Sけれども」は、「問題の家人は今留守にしているが、自分はもうすぐ帰ってくると思う。しかし、その情報だけでは相手にとって不十分かも知れない」という心情を表し、相手の反応を求めていると説明される。しかし、同じように「Sけれども」が現れると仮定して（4e）のように

言えるか、というとこれは不適切な発言になるであろう。先行研究で指摘されているように、「Sけれども」が単に「やわらげ」とか「丁寧さ」を表すということであれば、Bとしては相手に対して一貫して同じ言語形式を用いて丁寧さを表しても何ら不思議ではないにもかかわらず、(4e) のようには言えないのである。何故か。これは、「自分の与える情報が相手にとって十分ではないかも知れない」ということと関係がある。つまり、(4e) で「はい、わかりました」というのは「問題の家人にきちんと伝言を伝える」という確約を相手に与えることであって、ここで「Sけれども」を用いてしまうと相手に対して「自分がこういうふうに確約することは（あなたにとって）満足いかないことであるかもしれない」、「伝えはする。しかしそれがあなたにとって満足がいくものかどうかわからない」と伝えることになってしまう。Aが伝言を依頼し、Bが引き受ける。こういう依頼を引き受けることが当然のこととして期待されている場面で期待にそえないかもしれないという返事をするということは不適切になるのである。もう一つ例を見てみよう。

次のようなエレベーターの乗務員と客のやりとりはどうであろうか。

(5)　A：ご来店くださいまして、ありがとうございます。
　　上へまいります。ご利用階数をお知らせください。
　B：～階、お願いします。
　A：～階、かしこまりました。おあと、ございませんか。
　　お待たせいたしました。
→　　○○の売り場、～階でございます（＊けれども）。　(SFJ2：36)

客に要請された階に到着したということは事実として伝える。そしてその伝達はいわゆる「言い切り」の形が適切だと思われる。「Sけれども」を用いて「～階でございますけれども」と言ってしまうと、Aは「お客様の指定された階についたのは確実である」ということと、「その階に着いたということが（客が自ら指定したにもかかわらず）希望にそえないかも知れない」ということを同時に表明することになってしまう。これは矛盾であり、不適切な発言となる。しかし、仮にこの「Sけれども」発話が適切なものになりうるとすれば、例えば「指定した階に到着はした。しかしここに相手が希望しているものは売っていな

い」というようなニュアンスを伝える場合等が考えられる。そしてその微妙なニュアンスこそ「Sけれども」が伝える「相手の期待にそえない、希望を満たすことができないかも知れない」ということであり、仮説1が支持される根拠となり得る。

金城（2001）では紙面の都合上十分に議論することができなかったが、佐藤（1994）の指摘する尻上りに発音される「Sけれども」の場合、仮説1を支持する根拠としても、語用論的にも興味深い問題を含んでいるのでここで詳しく見てみよう。佐藤の例をあげる。

(6)　A：いくつだったっけ、年

　　B：32だけど。

佐藤は、「Sけれども」が尻上りの語調を伴う場合、情報要求の内容が相手の感情を害するようなものであることと連動して失礼な言い方になると説明する。確かに、尻上りの語調で「Sけれども」が発話されると「挑発的」とか「問いただす」ような響きがあるが、これは佐藤の説明するように「情報要求の内容」に問題があるためではない。典型的に用いられる質問の答としての「Sけれども」が相手の質問の動機にまで踏み込んだ表現であることと関係がある。ここで尻上りの語調が問題となるので詳しく見てみよう。発話の終わりを上げ調子のイントネーションにすると疑問文になるというのはよく知られている事実である。

(7)　山田さんは明日学校へ来ます↑

（↑）を上げ調子のイントネーションを表すとすると、(7) の文は上げ調子で発話されることによって疑問文となる。この場合、「来ます」が徐々に上げ調子に発音されるのではなく、「す」の部分のイントネーションのみが変化する。

振り返って、(6) におけるBの「32だけど」の場合、佐藤が言う「尻上り」のイントネーションというのは (7) で見られるように、「だけど」の「ど」の部分が上げ調子で発話されるのだと思われる（英語話者に見られるような徐々に「尻上り」になるイントネーションとは異なる）。つまり、このイントネーションは疑問文の音調の1パターンであると考えられるのである。ということは、BはAの質問に対して情報を提供する（＝答える）と同時に、（音調上）B

はAの質問に対して質問で返しているということになる。いわゆる「言いさし」の「Sけれども」が典型的に「ためらいがちな、ゆれを伴った口調で、決定的な印象を与えないように発音され」（日本語文型辞典　1998：109)、「下げ調子」で発せられるのとは対照的である。(7) が「挑発的」にならないことからも分かるように、平叙文が疑問文の音調を伴ったからといって「問いただす」ようなニュアンスを持つとは限らない。では、「Sけれども」が疑問文の音調で発音されると「挑発的」であると感じられるのは何故であろうか。

結論を先に言えば、Bの質問というのは相手の質問の動機を問いただす問いかけになっているからである、と考えられる。まず (6) のBと (7) の違いを調べる。(7) では疑問文として相手に明日山田が来るかどうかの情報を求めているのに対し、(6) のBでは疑問の音調をとってはいるがBは何らかの新情報をAから求めているわけではない。Bはここで自分が32歳であるということを（相手若しくは）自らに問いかけている訳でもない。では、疑問のイントネーションは何を問いかけるために用いられているのか。「Sけれども」は「相手の質問の動機を満足させられないかも知れない」と話し手が感じていると主張されたことを考えると次のように推測される。Bの提供する情報はAの質問の動機を満足させるものではないかもしれない。しかしながら、「一体なぜそんなことを尋ねるのか」と問いかけ、逆に「そんなことを聞いてどうするつもりだ」というBの姿勢を暗示することになる。つまり、相手の質問の動機への配慮を表す標識に疑問を表す音調を加えることによって、その動機に疑問を投げかけることになるのである。佐藤が「挑発的」だとか「問いただす」口調と指摘しているのはこのように相手の質問の意図を知ろうとすることから生じるものである。そして、この分析はこれまでの「やわらげ」の表現とか「遠慮」を表すといった分析からは導き出せないものであって、仮説を強く支持する根拠となると考えられる。

以上、金城（2001）で提案された仮説を検証してきた。結果、(i)「Sけれども」は質問に対する答えとして現れることが多いが、それは相手の質問の動機へ配慮したためであること。(ii) これまでの分析のように「やわらげ」の機能としてなら、コンテクスト上現れてもおかしくない場合なのに、実際には不適

切な発言になることがある。相手の期待に応えて当然であるという場合には、「Sけれども」は現れない。(iii)「挑発的な」言い方になる場合は佐藤(1994)を除き先行研究の分析ではあまり触れられることがなかったが、仮説によってうまく説明できることがわかった。次に「前置き」としての用法、並びに逆接の接続詞としての「けれども」がここで見た「言いさし」とどのように関わっているのかの検討に移る。

2. 前置きとしての「Sけれども」

ここで問題とする「前置き」としての「けれども」の用法とは、次のデータように話の導入の際に用いられるものを指すこととする。

(8)[5] →坂上：えーっとね　これバッタリ系の話なんですけど
　　MC：はい

歴史的な用法の変遷については他の文献にゆずり、ここでは現時点における「けれども」の用法的なつながりを考えてみたい。以下、先のセクションで検証された仮説1を応用できないかということに議論をしぼることにする。ここで前置きの「けれども」の場合も先の仮説1の延長上に捉えられると考え、次のような仮説2をたてる。

仮説2：話し手は、「これから話す事柄は聞き手の希望や期待を満足させるような内容ではないかもしれない」という相手への配慮を示す標識として「けれども」を用いる。

仮説2の特徴は、これまで別々に扱われてきた「やわらげの表現」と「前置き」の機能は実は同じ原理から出発しているとするところにある。

「前置き」とは、これから何について述べるかという一定の指針、もしくは枠組み(フレーム)を示す働きをする。そして、「面白い話なのか、そうでないのか判断するのは構わないが、面白くない場合でも容赦して欲しい」というのが根本にあると考える。先の仮説1では、「自分が提供する情報が相手にとって不十分ではないか」、そして「情報は十分かもしれないが、その情報を要求するもととなった相手の動機並びに期待にそえないものなのではないか」という話し手の心情を表わすとされていたが、ここでも再び、「相手の期待」にそえないお

それがあるという点で「Sけれども」は同じように聞き手への配慮を表わしていると考えられるのである。以下、この仮説２を検証していく。

次のデータを見てみよう。

(9)[6] (a)　けい：そうですね

そしたらあの一うちのあの嫁はんのねえ

(b)　ＭＣ：　ええ[7]

→　(c)　けい：話しなんですけど

(d)　ＭＣ：ええ

(e)　けい：あの僕子供二人いてるんですよ

(f)　ＭＣ：ええ　ええ

→　(g)　けい：まあこりゃ人に話すまでもない話しなんですけどね

(h)　ＭＣ：(笑) いやそんなことない

ここには前置きと考えられる「Sけれども」が２度現れる。(9a-c) の「うちのあの嫁はんのねえ話なんですけど」は、話し手がこれから自分の妻のことについて話をするという導入の役割を果たしており、仮説２によれば、「この話は聞き手にとって興味のない話しかも知れない」という心情を表わしていると考えられる。では、もう一方の (9g) はどうであろうか。これも「導入」としての機能を担っており、「導入を２回行っている」といってしまうのは簡単だが、果たして導入は２回必要なのだろうか。(10g) は別の働きをしているのではないか。この場合「相手に断りをいれて」話を始める前置きとしていると考えた方がよい。では何故「相手に断りをいれる」のか。それは、導入のために (9a-c) を用いたが、話し手は依然として「聞き手が自分の話を面白いと思ってくれるかどうかわからない」。相手へ配慮して、自分の妻の話を始めると導入したにもかかわらず、再度これからする話は「相手の期待」にそえないかもしれないと念を押すことになったと考えればすっきりする。

相手へ配慮し相手の期待するような話はできないかも知れないと断られると、聞き手としては逆にどんな話なのだろうかと興味を持つことになる。「Sけれども」は、話し手の配慮を表わすがゆえに、聞き手にとっては「そんなことはないだろう」と逆に期待をもたせる効果を持つことになる。(9h) でもそれがうか

がえる。このような副次的機能が導き出されるのも、仮説2によるものである。次のデータで詳しく見てみよう。

(10) [8]

(a) 高杢：神様ヘルプねえ
(b) ＭＣ：　　ええ
(c) 高杢：そうです　あ　一つですね
(d)　　その子が神様ヘルプって叫んだんじゃないかな
→ (e)　　っていうことはあるんですけどね
(f) ＭＣ：高杢さんじゃなくて
(g) 高杢：　　ええ
→ (h) ＭＣ：　　その子 ｛ っておっしゃいましたけど
(i) 高杢：　　｛ ええ　ええ
(j)　　ええ　僕と遭遇した子が
(k) ＭＣ：　　ほう
→ (l) 高杢：僕と遭遇しなきゃよかったなってゆうことなんですけどね
(m) リサ：ん？
(n) ＭＣ：ずいぶんこう
(o) 高杢：すごい前ふりですよね
(p) ＭＣ：　　すんごいもう聞きたくなっちゃった
(q)　　みんな耳　すんごい ｛ 聞きたくなっちゃった
(r) リサ：　　｛ 聞きたい
(s) 高杢：もうボタンでもはずしてしゃべっちゃおうかなー

これは毎回ゲストを招いてそれぞれに様々なテーマについて話をしてもらうという番組からとったものである。「神様ヘルプ」というテーマを与えられたゲスト（高杢）は、自分が窮地に立たされた話ではなく、自分と出会ってしまったがためにその相手が困った状況に陥った話を始めるというのである。「前置き」の「Ｓけれども」が（10d-e)、(11l）と二回現れる。このゲストは（10d-e）で導入を行っているが、聞き手はそれが十分ではないとして、先に見たように(10h)の「Ｓけれども」で会話の順番を引き継ぎ、さらなる説明を求める。それに答

える形で、再度（10l）で「前置き」を繰り返している。「けれども」を用いてこの話が「相手の期待にそえないかもしれない」と断りをいれているが、ここではこれが話を始める上で相手を引き付ける効果をもたらしている（10p-r）。これまで指摘されてきたように、単に「前置き」として「Sけれども」が用いられるという分析だけでは何故相手を引き付けるようになっているのか、相手に期待を持たせるような話ぶりになるのかということが説明できない。「けれども」を用いずに導入をすることはあるであろうし、単に「前置き」の機能と一くくりにしてしまうと、言い切りの場合と「Sけれども」との相違が見えてこないのである。仮説2によって主張されているように「相手の期待にそえないかもしれない」という話し手の心情を表わすという裏付けがあって初めて「Sけれども」が「前置き」として機能している理由が説明される。

3.「けれども」の機能

以上、いわゆる「言いさし」の「Sけれども」が聞き手への配慮を表わす標識となっていること、それは話をし始める際の「前置き」の場合にもあてはまることを見てきた。しかし、「前置き」の用法として先行研究の対象となっているものには、上のデータにみられる使い方ばかりではなく、例えば

(11)　田中ですけど、入ってよろしいでしょうか

というものも含まれる。以下、このような例も含めて、あらためて逆接の接続詞として認識されている「けれども」の用法、前置きとしての用法、そして「言いさし」の用法がいかに関連づけられるのかについて考察してみたい。

まず、この関連づけの前提として、問題点が明確になるように認知的に異なった2つのレベルを想定しよう。第1に「S1けれどもS2」で、S1とS2が（これまで指摘されてきたように）確定逆接を表わすレベルを文レベル、そして第2にS1とS2がそのような逆接関係を表わさずに用いられたり、また「Sけれども」として用いられるレベルを談話レベルとしよう。「文レベル」とここでいうものは、S1とS2の接続のみを問題にする場合、S1とS2はどのような関係（逆接・順接）にあるのかを問題にするレベルである。「談話レベル」とは、S1とS2のつながりを度外視し、対人関係を問題とするレベルである（これまで検討

されてきた「相手への配慮」の用法が含まれる)。これは次のようにまとめられる：

文レベルの「S1けれども／がS2」　　：論理関係

談話レベルの「S1けれども／が（S2)」　：対人関係

この前提のもとで、あらためてそれぞれの用法の繋がりを考えると、「文レベル」から「談話レベル」への転換がどのように関係づけられるかの考察が重要であることがわかる。そして、以下議論されるようにこの二つのレベルは「期待」という概念で結びつけられているのである。まずは文レベルのS1とS2の関係から見直そう。

3-1. 確定逆接助詞としての「けれども」

接続助詞というのはこれまで論理的関係を表わすと考えられてきたという経緯があるが、そういった論理的因果関係では捉えられない側面をもつと主張する井島（1999）の分析から見てみよう。

井島は接続助詞について、これまでは仮定／確定、順接／逆接とを組み合わせた４つの領域に「論理的」接続表現が納まるはずであると暗黙のうちに了解されていたことについて疑問をなげかける。

(12)　(a)　太郎が来るのに、花子は帰る。

　　(b)　太郎が来れば、花子は帰らない。

(12a) には (12b) のような心的内容（＝「期待」）があり、「が」、「のに」、「けれど」等、いわゆる逆接確定表現は「現実が期待に一致しなかったことを表わしている」という：

> 「・・・従来“論理的”接続表現は仮定／確定、順接／逆接の十字分類によって区分けされるそれぞれの領域すべてが同価値であると考えられていたように思われるが、それらは順接仮定条件で表わされる話し手の期待を中心として、それと現実や他者の期待との対比との一致、不一致によって使い分けられる、極めて認知的な表 現であることがわかる」(1999：110)

逆接確定（「が」、「けれども」）では主張内容と期待内容に対立があり、対比を

表わしたり、並列にも用いられ、「このような用法が所謂前置きの用法に拡大していったものだろう」(1999:113) とする。そして「順接仮定」表現が「期待の表現そのものである」という。つまり、

(13)　(a)　忍者なら手裏剣が使える。

　　(b)　サスケは忍者だけれど手裏剣が使えない。

(13b) の背景には (13a) という話し手の期待があるということである。このように命題における事実関係の対立を表わす記号としての逆接の助詞は、それとは次元の異なる「主張内容」と「期待内容」との対立として捉え直される。話し手や聞き手の「期待」ということを考慮するということは、即ち、文レベルから談話のレベルへ (用法が) 近づいたことを意味する。さらにもう一点、文レベルから談話レベルへの橋渡しをしていると考えられるケースを見て、逆接の助詞の用法がいかに談話上のストラテジーと関係づけられているかを検証してみよう。

3-2. 「倒置」と「期待」について

3-1では井島 (1999) をもとに、「けれども／が」を用いた (確定) 逆接は根底に「順接仮定」が「期待の表現」としてある、という主張を見てきた。ここで、井島の「期待」という概念をもう少し広く捉えて「倒置」現象を通して、文と談話の2つのレベルがいかに関係づけられるのかを見てみる。

一般には、「倒置」と言えば、

(14) [9]ＭＣ：え　新潟ですよね　笹団子って

のような、述語が言い切りの形をとっているにも関わらずその後に何らかの文の構成要素が続く場合を指すが、ここでは「S1けれども S2」が「S2、S1けれども」のような形をとるものを問題とする。このような「倒置」操作を行っても、S1とS2の論理関係は変わらないはずである。しかし、それは「文」レベルでの話であって、S1を先にするか、後に持ってくるかというのは、「談話」レベルでは重要な役割を果たしていると考えられる。「倒置」自体、語順を入れ換えたものだという分析と言い切りの形の後に「言い足す」、付加的要素だとする見方があり意見が別れるところであるが、倒置にせよ付加にせよ、「S 1けれど

も」を言うか言わないか、言った場合にはどのような差が現れるのか、データを見てみよう。

(15) [10]

(a) 大仁田：お前らな　単位ほしけりゃ献血行ってこいっつって

(b) 観客　：(笑)

(c) 大仁田：お前らな な お前らが勉強したって何の役にもたたねえんだ

(d)　　だけど社会の役に立つんなら俺は単位やるってこうー

(e) 観客　：(笑)

(f) 大仁田：言われたときには/？　？/すごいなー

(g) 森口　：　　すごーい先生

(h) ＭＣ　：献血してきたら単位やる

(i) 大仁田：単位やる

(j) ＭＣ　：すごいなーほんとに

(k) 大仁田：はい　行ったのは二名だけだったですけど

(l) 全員　：(笑)

この場合、S1を「(実際に献血に) 行ったのは二名だけだった」、S2を「(先生に) 献血に行ったら単位やると言われた」とすると、「S1けどS2」という具合に話を進めた場合と、データ (15) の場合とでは明らかに話しの面白さに差がでてくる。倒置した (もしくはS1を付加した) 場合に得られる聞き手の笑い (15l) はそうしなかった場合 (＝「S1けどS2」) にはおそらくおこらなかったであろう。何故か。先に触れた井島 (1999) の「聞き手の期待」ということがここで重要となる。つまり、S2を先に述べることによって、聞き手は、「おそらく単位欲しさに学生は皆献血に行ったであろう」と期待することになる。しかしながら、その期待は「S1けど」で裏切られることになり、期待値と現実の間にギャップが生じる。それが笑いとなって現れたのである。逆に、「S1けれども」と先に述べてしまえば、聞き手はそれほどの期待を持たずにS2を聞くことになり、ギャップは生じない。これは倒置によって「S2、S1けれども」が談話レベルで重要な働きをし、文レベルから談話レベルへ用法が拡大する道筋を示している。

3-3. 「S1けれども S2」について

文レベルの逆接の接続助詞「けれども」や「が」の用法は「話し手もしくは聞き手の期待（値）」と結び付いているという井島の分析を見た。さらにこの主張は倒置のデータによって談話レベルでの「聞き手の期待」と密接な関係にあることがわかった。先のセクション1と2で見たように、「言いさし」と「前置き」の用法の「Sけれども」も、相手の（質問の）動機や期待ということが背景となっていることが仮説を通して検証された。以上のことから、これまで別個に扱われていた「けれども」の用法は「期待」というキーワードによって繋がっているということがわかる。では、「全く関係ない叙述を繋げる」（森田1985：135）という用法もこれまで見てきたような用法と関わりがあるのであろうか。最後にこのことについて考えてみたい。

森田は、上でも触れたように「けれども」には「全く関係ない叙述を繋げる」用法があるとする。しかし、実際にはS1とS2が関係づけられないほど別個の事柄について述べる場合には、「けれども」が不適切になる。次の例を見てみよう：

(16) ＊今日は晴れているけれども、この洗剤には植物成分が含まれている。

ここでの2つの文、「今日は晴れている」と「この洗剤には植物成分が含まれている」は他の接続方法、「て」を用いたり、「ので」・「のに」を用いても全体としておかしな文章になってしまう。2つの文の間に「直接の因果関係」が見いだせないからといって、「けれども」は「単なる繋ぎ」（森田1985：135）であるとは言えないのである。となれば、一見全く関係ない2つの叙述の結び付きを支えているのは何なのか。先の議論を継承して言えば、この「支え」となっているのは談話の流れに他ならないと思われる。つまり、全く関係のない叙述同士が「けれども」で結び付けられている場合というのは、逆接を表すという文レベルではなく談話レベルでの用法であり、実は「前置き」とそれに続く展開の文との繋がりのことなのではないかと考えられるのである。データを見てみよう。

(17) [11] → 森口：まったくジャンルの違う大先輩なんですけど
日野皓正さんに

ＭＣ：はい　あのジャズトランペーッターの

森口：はい　日野さんにお世話になりました

「まったくジャンルの違う大先輩」というのは後続の「日野皓正」という人物を指すというのは明らかであり、この照応関係が２つの文の繋がりを支えている。また、森田（1985）があげている次のような場合でも、

(18)　私は吉田ですけれど、あなたはどなたですか。

「私」と「あなた」が対比され、さらに内容的には「前置き」として自己紹介をし、次に相手の名前を尋ねる。これは談話上自然な流れであり、「接続助詞」という文レベルのみを議論の対象としていたのでは捉えられないものである。先に見た（12）についても同様のことが言える。しかし、注意すべきはこれまで「期待」という糸で結ばれてきた「けれども」の用法がここでも同じ延長線上にあるという議論はここでは成り立ちそうにないということである。つまり、同じ様に「前置き」としての機能は果たしているが、先に見た「言いさし」の前置きと「2つの文を繋いだ」場合の前置きとの間にはずれがあるということである。ここではこの「ずれ」を如何に関係づけるか、あるいはこれまで提出された仮説より説明力のある仮説に基づいてこれらの用法を関係づけるのか、ということについては今後の課題としたい。

4.　まとめ

セクション１では金城（2001）で提出された仮説を検証した。結果、いわゆる「言いさし」の「Ｓけれども」は「相手の期待にそえないかもしれない」という聞き手への配慮の現れであることがわかった。また、セクション2では「前置き」の「Ｓけれども」の用法を調べたが、そこでも同様に「相手の期待」ということが重要な働きをしていることを見た。そしてセクション3では井島の分析を引用し、これまで「逆接」の助詞として考えられてきた「けれども」にも「期待」ということが背景となっていること、文レベルから談話レベルへの用法を関係づける際にも「期待」という概念が深く関わっていることをみた。また、一見「全く関係のない2つの文」を結び付ける用法は「期待」というキーワードを用いて分析することはできなかったが、「前置き」の用法の延長線上に捉えら

れることがわかった。

最後にこれからの研究の方向性について触れておきたい。この論文では「けれども」と「が」を同等の働きをするものとして、一貫して「Sけれども」として扱ってきたが、今後「が」を「けれども」と独立・対比させて研究する必要があるであろう。ここで「談話のレベル」として設定された中にも書き言葉のレベルと話し言葉のレベルというふうに異なるレベルが存在するので、「けれども」と「が」がどのレベルで用法上重なり合うのか、棲み分けができているのかといった研究も必要である。また、「けれども」の用法のつながりに焦点が当てられてはいるが、3-2で見た倒置（付加）によって会話のストラテジーとして働く場合のように、会話の流れの中でどのような働きをするのか、コミュニケーション上、相手にどういう影響を与えるのか（言いさしの「Sけれども」の多用は優柔不断な印象を与える等）といったことを詳しく調べる必要がある。そして他の「言いさし」表現との関わり合い等を研究する必要があるであろう。そしてそれらの知見が今後の日本語教育へ取り入れられ、日本語を学習する者がよりよく日本人とコミュニケーションがはかられるようにすべきであると考える。

注

[1] Situational Functional Japanese, vol. 3, p. 12 を指す。以下同様。

[2] Situational Functional Japaneese のドリル練習用第2、第3分冊の中で「Sけれども」の出現頻度を調査した。結果、話題を切り出す際に用いられる場合が37例あった。それ以外が44例。そのうち、「Sけれども」が質問に対する答えの場合に現れるケースは29例あり、これは約66％にあたる。念のために付け加えておくと、44例中、「Sけれども」で会話が始まっていて（その前の）相手の発話が特定できないケースが5例あり、これを除くとおよそ74％になる。NHKラジオ相談（30分番組）の中では「質問・答え」のやり取りが35例あり、そのうち13例に「Sけれども」が用いられている。

[3] Itani (1993) では関係性理論の枠組みを用いて「やわらげ」や「丁寧さ」は聞き手の側が離しての要求に応じなくても応じてもよいというオプションから派生するものであると分析されている。

[4] 1991年6月放送、NHK ラジオ「子育て相談」より。

[5] 2000年3月10日フジテレビ放送、「ごきげんよう」より。

[6] 1995年9月27日フジテレビ放送、「ごきげんよう」より。

[7] データの表記はシッフリン（1987）に基づく。
鍵括弧［：A と B の発話のオーバーラップの始まりを表す。
Z:A の発言の終わりと B の発言の始まりの間にポーズが無いことを示す。
/??/：発話内容が不明な場合を示す。
ここでのひらがな表記の場合、ポーズはひらがな一文字分空ける事によって示す。句点や読点は下げ調子を表す記号としても用いていない。

[8] 2000年3月14日フジテレビ放送、「ごきげんよう」より。

[9] 2000年3月30日フジテレビ放送、「ごきげんよう」より。

[10] 2000年5月4日フジテレビ放送、「ごきげんよう」より。

[11] 2000年5月4日フジテレビ放送、「ごきげんよう」より。

日本語参考文献

井島正博.　「助詞から探る日本文法4：接続助詞あるいは期待対比構造」
『月刊　言語』vol. 28, No. 4 (1999): 108-113.

川村よしこ.「日本人の言語行動の特性」『日本語学』10-5（1991）51-60.

金城克哉.　「文末表現としてのけれどもの機能について」
『琉球大学言語文化研究紀要　SCRIPSIMUS』No. 10（2001）

熊井博子.　「外国人の待遇行動の分析（1）－依頼行動を中心にして－」
『静岡大学教養部研究報告　人文・社会科学篇』28-1 (1992) : 1-44.

グループ・ジャマシイ編著.　「日本語文型辞典」(1998)

佐藤勢紀子.　「言いさし『…が/けど』の機能：ビデオ教材の分析を通じて」
『東北大学留学生センター紀要』1（1993）：39-48.

佐藤勢紀子. 「中上級日本語教育における中断文『…が/けど』の扱い方」
『東北大学留学生センター紀要』2 (1994) : 17-25.
白川博之. 「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要6』(1996) 9-17.
筑波ランゲージグループ. 『Situational Functional Japanese』vol. 2&3 (1992)
畠弘巳. 「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」
『日本語学』10-10 (1998) : 10-18.
水谷信子. 『日英比較話しことばの文法』東京 : くろしお出版, 1985.
水谷修・水谷信子. 『外国人の疑問に答える日本語ノート1』東京 : The Japan Times, 1988.
三原嘉子. 「接続詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」
『横浜国立大学留学生センター紀要1』(1994) : 79-89.
森田良行. 『基礎日本語2』東京 : 角川書店, 1980.

欧文参考文献

Itani, Reiko. "Japanese Conjunction Kedo (=but) in Utterance-final Use: Revisited." 『神奈川大学 人文研究』(1993) : 15-37.
Lakoff, Robin T. "The Logic of Politeness: or Minding Your p's and q's." Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society (1973): 292-305.
Sacks, Harvey, E. Schegloff, and G. Jefferson. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking in Conversation." Language 50 (1974): 696-735.
Schiffrin, Deborah. Discourse Markers. Cambridge: Cambridge University Press. 1987.

論文要約

This paper reexamines the function (s) of the sentence-final use of "keredomo." Kinjo (2001) presented a hypothesis concerning this usage of "keredomo": when the speaker uses S-keredomo, s/he is afraid that s/he is not providing enough information which satisfies the motivation of the inquiry. Critically reconsidering this hypothesis and reviewing other usages, another hypothesis will be offered: "keredomo" functions to mark that what the speaker says might not come up to the hearer's expectation. This hypothesis will be supported by various examples from actual discourse data.